

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【針ヶ谷小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	全体的には基礎基本の定着が見られるが、個人差が大きい。課題別グループ学習や単元内で自由進度性を取り入れるなど個別最適な授業の工夫をこれまで以上にやっていく。個別支援の時間を多く作るようにしていく。また、高学年の社会科の学習では、児童一人ひとりがタブレットを用いて個別最適な学習を図っているため、思考力の伸びは見られたものの、基本的な知識・技能についての定着の弱さが顕著となったので、基礎学力を押さえる時間と思考力を伸ばす時間をバランスよく組み合わせて取り組んでいく。
思考・判断・表現	国語だけでなく、応用問題への抵抗感や「書くこと」自体に対する抵抗感をもっている児童が多い。そのため、国語では各学年の中でモデル文を学ぼうと取り入れ、作文用紙の工夫を行ったりして「書くこと」へのマイナスな気持ちを減らしていくことが重要である。他教科においては今年度同様ふりかきりを書く時間を確保し、自分の考えを表現する力となる。算数や理科においては日常生活との繋がりが大きな課題であり、児童の中で単元幅に接続してしまい、なりやを見せず、1つの単元にとまらざる傾向がある。そのため、カリマネデザインマップを用いて年度初めに単元についての確認を行い、教材研究の充実を図る。また、カリマネデザインマップを各学年の掲示版に貼ることで、教科間、または他教科とのつながりを児童自身が価値づけできるようにしていく。さらに、答えのみがあってもいいのではなく、児童自身に解く過程の重要性にも気付かせたい。そのため、図・式・言葉の関連性や自分の立式の意味の説明などにも特化した指導をする必要があり、評価についても部分点を積極的に採用していくことも効果的であると考え。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt; 個人差が大きい。 習得した漢字や語彙を日常的に活用する力。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 個別最適な授業の工夫。 効果的な家庭学習の取り組み方の指導。</p>	⇒ 今年度の学校課題研修のテーマを「もっと学びたい! 針ヶ谷の育成」とし、児童が主体的に学習に取り組める工夫を学校全体で考えていく。その中で自由進度学習やルーブリック評価、メタ認知などを意識していく。【通年】 ワークシートやドリル/ワーク等を活用し、文章や漢字の成り立ちや語彙力を豊かにする等、基本的な反復・習熟に取り組む。【単元毎に実施】
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt; 登場人物の心情を具体的に想像することや、問題や話し手の意図を捉えて考えることに課題がある。 学力は高いが、問わ方が変わるなど応用問題に対応できていないことが課題である。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 授業の中で児童の思考を深める教師の発問の工夫や学習したことを生活場面に関連付けて指導していく必要がある。</p>	⇒ 学校図書館の活用や読書活動の充実を図り、学年の実態に応じてピアサポート等を行うことで自分の考えを自分の言葉で表現できるようにしていく。また、行動計画だけでなく状況描写や場面の変り変わりから想像することができるように指導していく。【1度の実施】 学習活動の中で、文章表現だけでなく、図や絵、式にも表現できるようにしていく。【適宜】

⑤	評価(※)	調査結果	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	1 結果分析(管理職・学年主任等) 2 詳細分析(学年・教科担当)	これまで以上に単元を通じた教材研究を行い、自由進度学習を各単元の中で設定可能なところは取り組み、習得事項を活用する場面を設定した。その結果、個別最適な学びが実現し、低学年でも自分に合った学びの方法を選択することができた。また、正しい学びの方法を選択することが学びの楽しさにもつながり、一人ひとりが自己調整力を高めながら、主体的に学習に取り組む姿勢が見られた。
思考・判断・表現	A	3 職員会議(校内研修等)	ルーブリックの振り返りに取り組むことにより、メタ認知の育成や生活場面との関連付けができた。自分の考えや意見をどの教科においても発表したり表現したりする場を設けた。また、その方法を1つに絞らず、プレゼン、ポスター、新聞、地図、ノートなど児童一人ひとりが選択して取り組めるようにした。その結果、児童が友達の良いところを受け入れ、取り入れた姿勢が見られた。カリマネの見直しをし、職員室前に全学年分冊したことで他教科との繋がりを教師のみならず、児童も意識して学習に取り組むことができた。低学年における読書活動(同書選定の本を4人グループで一冊3分冊ずつ読みます)を実施したことで児童がさまざまなジャンルの本と出会うきっかけとなった。その結果、自分の感想と要約の違いが分かるようになったり、読書のスピードが上がったりした。また、内容の理解度が高まり、自分から難しい本に挑戦する姿も見られた。一方、高学年はブックトークや物語づくりをしたことで本への関心が高まった。絵画と物語を結び活動を行い、教科横断的な学習も意識的に行った。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、漢字など基礎的、基本的な知識・技能は身に付いている。引き続き、普段から漢字を使ったり、読書の中でわからない言葉が出たときに辞書を用いて意味を確認したりすることを指導していく。 算数では、グラフの読み取りや図形の面積の求め方など基本的な「知識・技能」は身に付いている。しかし、無解答も一定数見られているため、得た知識・技能を活用し、粘り強く学習に取り組むことも必要である。 理科では、受粉の仕方や実験の仕方など基礎的な学習内容は身に付いている。しかし、学習した内容がその単元にとどまってしまう傾向があるため、他の単元とのつながりを意識して指導していく必要がある。
思考・判断・表現	国語では、文章全体の構成を捉えて要旨を把握し、目的に応じて文章と図表を結びつけるなどに課題が見られた。あらゆる複合問題を目にする機会を増やすとともに、答えが明確ではないものへの解答に自信をもたせるために、文字数の制限を設けるなどの条件をつけて自分の考えを書く練習を繰り返すことが大切である。 算数では、作図の過程で課題が見られた。作図をする際の大切なことが図形の性質と関連していることを何度も押さえる必要がある。 理科では、水のあたたまり方や金属の性質に課題が見られた。学習と日常生活が切り離されていることが多かった。また、日常生活に関連付けて指導していくことが大切である。 追加:3教科共通して、知識があっても、それを活用することや日常生活に置き換えて考えることに難しさを感じているため、活動内容へのより深い理解が必要となる。問題と解答を結びつけることも大切である。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	4教科ともにいずれの学年においても基本的に市平均を上回る結果となった。しかし、学年ごとに細かく見てみると、正答率にばらつきが見られ、学年によって、得意な分野と苦手な分野が明確に現れた。各学年ごとに苦手な分野の強化が必要である。しかし、社会科については、5、6年生ともに、市平均は上回ったものの、基本的な知識技能の定着が難しくなっているため、日々の学習において、児童の行う調べ学習にプラスして知識を身に付けるような授業を展開していくことも重要である。そのため、授業の冒頭に小テストを取り入れ、用語を重点的に確認する時間を取ったりするなどしていく。算数においては、知識・技能が確実に定着していることが思考・判断・表現する力にもつながるため、正確に学習内容を理解できるようにしていきたい。また、各教科調査の時間配分においても前半の問題に時間がかかると後半の問題の無回答率が高くなる傾向があるので、問題を解く速さとともに身に付けていきたい。
思考・判断・表現	4教科ともにいずれの学年においても基本的に市平均を上回る結果となった。国語では、書くこと、話すこと、聞くことに課題があり、特に、書くことの項目においては、無回答率も0.5%と比較的高い傾向であった。授業の中でモデル文を学ぼうと取り入れて書く時の型を理解させることが無回答率軽減につながる。算数では、特に、データの活用と数量が変化しても割合が変わらないことへの理解が不足している傾向があった。図・式・言葉の関連性の理解を高めることや、データを見る視点を育てる授業を取り入れることが重要である。算数、理科ともに学習内容を日常生活に落とし込むことが苦手である。教科を横断して指導をする中で定着を図りたい。また、単元の中では習得しても、使用頻度の低い実験器具の使い方に関しては、定着が難しいため、単元外における扱いを考えていく必要がある。社会では、知識技能に比べ、思考判断の方が正答率が高く、児童の興味関心の高さがうかがえる結果となった。

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	学校課題研修を通して教員同士の対話を増やしたことで児童が主体的に学習に向かうための「導入の工夫」「自由進度学習」毎回の「振り返り」を大切にすると授業を意識できるようになった。積極的に授業を公開するなど切磋琢磨する様子が見られる。 自由進度学習では児童一人ひとりの実態に応じてワークシートやデジタル教材を活用している。その結果、いずれも自分の課題にあった学習方法を選択できるようになってきている。また、高学年では週単位の教科担任から学習内容が提示され、そこから個人が学習計画を立てる練習をしている。	
思考・判断・表現	B	学年ごとにかリマネデザインマップの見直しと前後の学年のつながりを意識したことで、これまで以上に系統立てた指導を行えるようになった。また、見直したカリマネデザインマップを廊下に掲示し、児童がいつでも目にする機会を増やしたことで学習の価値づけができるようになった。高学年においては、それぞれの教科の中で児童が他教科とのつながりを意識しながら活動する工夫をしている。	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)